

木曽南部の暖帯植物観察会

赤 羽 敏 明

第133回例会は、平成元年11月25日(土)26日(日)の両日、木曽郡南部山口村を中心に観察会が行われた。

参加者は、当日参加の方を含めて奥原弘人、中沢袈裟延、宮島吉彦、今井建樹、小林富雄、小口好久、下岡英樹、岡田真由美、小林とし子、杉山兼二、楯誠治の諸氏と幹事の赤羽の、総勢12名であった。

25日、はやめに来た有志で妻籠宿を散策し、長野県天然記念物になっているギンモクセイ、これに着生しているヨウラクランを見学した。また和智野神社の社叢では、ユズリハ、アオジクユズリハ、ハナノキ、サカキ、赤い実をつけたヤブコウジ、白い花をつけたサザンカなどの暖帯植物を見ることができた。

夕方、妻籠にある民宿「大亀石」に集まり、奥原先生から木曽谷の気生蘭（着生蘭）についてお話をうかがい、植物研究雑誌第31巻（昭和31年）より先生の書かれた『木曽谷の気生蘭』の読み合せをした。

それによると、木曽谷では蘭の種類からみても、樹木の本数からみても気生蘭が最も多く着いているのはカヤであり、次はモミである。

尚、木曽谷に自生している気生蘭は次の7種である。マツラン、ヨウラクラン、カヤラン、ムギラン、マメツタラン、セッコク、モミラン

この内、モミラン以外はどれも本州（中南部又は関東以西）、四国、九州に産するので木曽にも産することに問題はないが、モミランは伊勢以東には未報告のようであり木曽に産することは注目に値する（以上、『木曽谷の気生蘭』より）

26日、8時に町営第2駐車場で当日参加者と合流し、山口村出身の楯先生の案内で国道19号を南へ向かった。

賤母大橋を渡った所で車を止め、旧国道沿いを歩いてみた。時季が遅いこともあり、花の咲いているものはなく、ホソバノヤマホロシの赤い実が印象的だった。

賤母学術参考保護林の中は常緑樹が多く、シキミ、ツクバネガシ、ウラジロガシなど、中でもテイカカズラは8mほどツルをのぼしていた。その他ミツバツツジ、フジウツギも見られた。

ここから南へ1kmの国道沿いに賤母森林公園がある。

ここでは、アラカシ、老木のためトゲがなく葉の

先が丸くなったヒイラギ、紅葉したコハウチワカエデ、オオモミジ、花をつけたツゲ、などが観察できた。

林床にはシュンラン、ナガバジャノヒゲ、ベニシダ、ヤブラン、ナンブアザミ、スズカアザミ、ノコンギク、白い胞子を飛ばしているフユノハナワラビなどを見ることができた。

国道から右折し木曽川にかかる彌栄橋を渡ると岐阜県坂下町、車窓から大きなカヤの木が目に入ってくる。このカヤの木に着生しているのがモミランである。奥原先生が探し当てたものであり、現在は岐阜県指定天然記念物になっている。

橋を渡った山口村にもどり、貯木場に車を止め河川敷の土手を散策した。

土手にはメリケンカルガヤ、この帰化植物は下伊那にも入っており、木曽谷では野尻の駅まで入ってきているそうである。

紫の花をつけたキツネノマゴ、瑠璃色の実をつけたナガバノジャノヒゲ、センダングサ、セイタカアワダチソウ、アレチウリ、ナガバノヤブマオ、マツカゼソウ、花をつけているチャ、オオキランソウ、トウバナなどが見られた。

水辺には、ハキダメギク、ワスレナグサ、トキワハゼ、などが見られた。

また、赤い実をつけたミヤマフユイチゴ、ヒサカキ、セキショウ、そしてここが北限とされているビナンカズラを見ることができた。ビナンカズラは、マダケの竹林の片隅に自生しており人目をさせているようであった。

水田には、白い花をつけたタネツケバナが目につき、その土手にはアラゲヒメジソ、スズメノトウガラシ、ミミナグサ、カサスゲ、ミヤマシラスゲ、オオキジノオシダ、メヤブマオ、センダングサなどが見られた。

国道にもどり南へ5分ほど車で行くと、左側に長野県天然記念物諏訪社叢がある。その中のシダレエノキの老木は貴重である。また、かつてはハイチゴザサがあったようだが今は見られなくなってしまっている。

3300㎡の社叢は暖帯植物が多く見られた。

上木層としては、スギ、ヒノキ、コウヤマキ、白い花をつけたヒイラギ、アラガシ、ウラジロガシ、

オオモミジ、ウワミズザクラ、下木層としては、イヌガヤ、サカキ、ソヨゴ、ユズリハ、アオジクズリハ、コマユミ、ヤブツキ、ツクバネガシ、ツルの仲間では、ツルマサキ、ツルアジサイ、テイカカズラ、キズタなどが茂り、林床には、ササクサ、ミヤコザサ、メリケンカルガヤ、チャなどが見られた。

社叢を後にし、山口小中学校より上の8区に向かった。1本のカヤの大木には、ムギラン、カヤラン、ヨウラクランの3種もの蘭が着いていた。

神坂の馬籠の林では、スギラン（ヒカゲノカズラ科）を何カ所も見つけることができた。スギランは岩の上に着生しており、さかんに孢子を飛ばしていた。

また、日当たりのよい所では、リョウノウアザミ

を見ることができた。

馬籠植物園で昼食をとった。標高610～620mに位置している植物園には、集めてきた暖帯植物ではなく、自然のままの姿を観察できるように自然林の中に遊歩道がつけられていた。

馬籠宿近くの水田の中には、小さな赤紫の花をつけたキクモを見ることができた。農薬が関係しているのだろうか、一つの水田にしか見つけることができなかった。

山口村神坂の南端の道路脇に、ウラジロを見ることができた。ここにしか確認されていない貴重なものである。

最後に、この会を有意義なものに深めてくださった奥原先生、楯先生に心より感謝申し上げます。

〔植物ニュース〕 145. サカネラン *Neottia nidus-avis* Rich. var. *mandshurica* Kom.

地生の無葉緑腐生植物で、地中に生ずる根茎には先が上向する根が多数束生する。長野県植物誌チェックリスト（1988）には報告されていないが、軽井沢と諏訪の釜無地区で確認されている。県下では大変少ない植物の一つであろう。

1989年6月2日 南佐久郡佐久町大日向のカラマツ林下に5m四方に多数の個体が見られた。

（吉沢 健、池田登志男）

146. キブシ *Stachyurus praecox* Sieb. et Zucc.

1989年9月23日に木曽郡檜川村橋戸沢上流（約1200m）を調査しているときにキブシが目についた。来春のために早くも花穂を下垂している。隣の株は果実が付いている。ところが花穂と果実が同時に付いた株はない。気になって林道沿いのキブシを1株残らず見たが、やはり同様であった。キブシは、隔年に結実するのだろうか。それとも、これはここだけの現象であろうか。（横内 文人、横内 正）

147. ホコガタアカザ *Atriplex hasta-ta* L.

学校のサルビアの花壇の除草をしていて、見慣れないアカザを採った。下葉は対生し、上葉は互生である。下葉の対生であることが、本種のよい特徴であるという（長田：日本帰化植物図鑑1976 p. 337）。

ホコガタアカザは、欧、北阿、西亜原産の帰化植物である。（横内 文人）

〔新刊紹介〕 信州大学教養部生物学教室編「ハイマツ及び高山生矮性低木の成長と適応戦略」、1989年3月発行。

この研究報告は信州大学の特定研究として1986～1989年に行われた研究の報告書である。本会会員の相馬潔・豊国秀夫・清水建美の3氏が参画している。内容は「ハイマツ低木林の落葉量と分解」に関する論文が2編（相馬）、「ホシガラスとハイマツ種子分散の関係」に関する論文が2編（吉田他）、「日本におけるリンドウとその近縁種の形態的形質に関する注釈」（豊国）の計5編からなる。

相馬氏の論文は1) ハイマツ林における落葉量が少ないこと、2) それにもかかわらず有機物層が厚く堆積するのは分解速度が遅いことを明確に示した。吉田氏等の論文はハイマツ球果と種子の成長とホシガラスの捕食の関係を経時的な調査と野外での実験を通して、ハイマツの種子の分散と定着に及ぼすホシガラスの役割について興味深いデータを提供している。豊国氏の論文はリンドウ、エゾリンドウ、オヤマリンドウを区別する形態的な形質について走査電子顕微鏡を用いて検討したものである。

今回の研究報告はいくぶん断片的である感は拭えないが、高山という特殊なしかし興味ある生態系における生物の存在様式についての研究の端緒として評価できよう。今後の研究の深化により、今回取り上げられた生物だけでなく高山帯の草本植物や高山帯に生活する昆虫を含めた生態系全体の洞察が得られることを期待したい。

この報告書は信州大学教養部生物学教室の吉田利男氏または豊国秀夫氏に請求すれば入手できる。

（K. I.）